

定年後最後の夢「キリマンジャロ登山」を実現して

平成 24 年 12 月 31 日

現役を退いてから 9 年近く・・・。

60 歳定年になったら仕事から離れ、健康にある程度の自信がもてる 70 歳までの 10 年間に、現役時代にながななかった、色々なことを実行してみたいと・・・・・・・・。

- ① 健康づくりとして、直ぐ近くにある神社の石段をとおり裏山に登って帰る、毎朝 1 時間程度の散策（7000 歩あまり）。
- ② 四季折々の草花作りや、野菜作り。
- ③ 公民館講座の受講や、地域でのボランティア活動。
- ④ 神社神道の基本習得。
- ⑤ 趣味の、登山・写真・そしてゴルフ等々。

定年後、希望を少しずつ無理のない程度に実行に移し、今では、①・②・③・④までは、毎日の生活の一部として溶け込んでいる。

そして、是非実行したいと思っていた⑤の趣味の登山。現役時代には、外国に行きたくても、長期の休暇を取得することはかなわず、自分の目で、その山容を確かめたかったが、実現できなかった、スイス・ヒマラヤ・アフリカの山々・・・。

定年後直ちに、登山電車を利用しての「スイス 8 日間のトレッキングツアー」に妻と二人で参加。「マッターホルン・アイガー・メンヒ・ユングフラウヨッホ・モンブラン」などの、雪を被った 4000m 級の峰々、その美しく素晴らしい風景に感動した。



「美しいスイスの風景をバックに」

次に今から4年前、長年の夢、「ヒマラヤのエベレスト」を、自分の目で確かめるべく、ネパール側、エベレスト街道より入山の「ヒマラヤトレッキングツアー13日間」に参加。4200メートル地点まで足を運び、世界最高峰エベレスト（8848m）の山容を確認することが実現でき、スイスとは、また違った感激に浸ることができた。



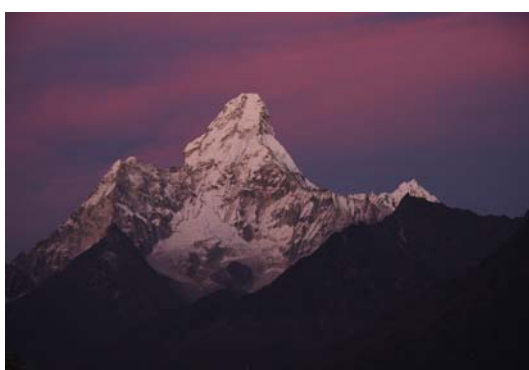
「朝焼けに輝くヒマラヤの6000m峰」



「左奥の頂が、世界最高峰エベレスト（8848m）」



「ヒマラヤの名峰アマダブラム（6812m）」



「夕陽に染まるアマダブラム」



「エベレストをバックに、はいピース」



「エベレストをバックにドイツの登山者と」

そして、今年2月23日～3月5日にかけて、定年後最後の夢、大阪のアミューズトラベル主催の「**アフリカ最高峰キリマンジャロ（5895m）登頂ツアー12日間**」に参加。運良く天候にも恵まれ、そして体調を崩すこともなく、高山病にもかからず、登頂確率50%の頂に立つ事ができ、大感激！！最後の夢を実現することができ、もう言う事は無い。

ここで、その最後の夢「キリマンジャロ登頂」の様子を、記録で綴ってみたいと思う。

○ 平成24年2月23日（木）

いよいよ、定年後実現したかった最後の夢「**アフリカ最高峰キリマンジャロ（5895m）登頂ツアー12日間の旅**」の出発だ。

岡山駅西口より関西空港行き12時15分発のリムジンバスに乗る。乗客は小生と10数人のお客。その中に8名前後の登山スタイルの一行がいた。よく見ると山陽新聞の登山カルチャーでお世話になった方がいて、お互い声を掛け合った。

彼等は、マレーシアの最高峰「キナバル山（4095m）登頂ツアー」に参加との事、お互いの登頂成功を祈った。

関空で大阪からの同行者6名（内2名は九州から）と旅行社（アミューズトラベル）の添乗員1名と合流。

○ 平成24年2月24日（金）

関西空港発23時40分のエミレーツ航空の飛行機にて、アラブ首長国連邦のドバイ国際空港に、午前5時45分到着。（時差 -5時間・所要11時間05分）

ここで、我々大阪よりの6名・東北より2名、計8名（男4名・女4名）の参加者と、添乗員1名の総勢9名が勢揃いし、今回のツアー参加者全員と顔合わせ、乗り継ぎの間に、簡単な飲食をとり、ターミナル内を散策。



「ドバイ国際空港到着」



「ターミナル内携帯電話店のヒゲの好青年と」

その後ドバイ発 10 時 45 分のエミレーツ航空の飛行機にて、ケニアの首都ナイロビのジョモ・ケニアッタ空港に、14 時 55 分到着。(時差－1 時間・所要 5 時間 10 分)

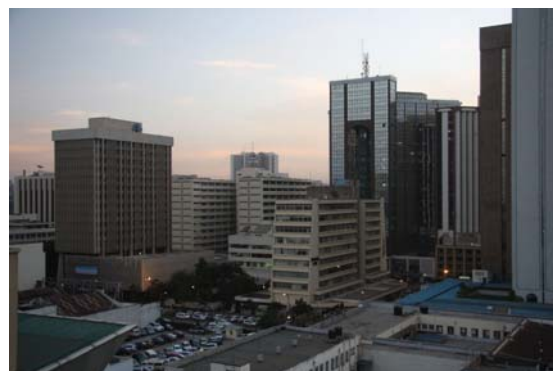
日本からの通算飛行時間は、**16 時間 15 分**である。

生まれて初めてアフリカの地に降り立った。どこまでも、どこまでも続いている広大な草原・サバンナ。狭い日本の地形とは比べ物にならない。

入国手続きを済ませ、専用車にてホテルへ。



「ケニアッタ空港」



「ホテル・ナイロビサファリクラブの窓より」

アフリカのホテルと言う事で、簡素なホテルを思い浮かべていたが、大都会の一流ホテルと変わらない、非常に立派なホテルであった。夕食をとり、明日からに備え、ゆっくりと眠る。

○ 平成 24 年 2 月 25 日 (土)

いよいよ今日は、キリマンジャロ登山基地の街、アリューシャ入りである。

朝、専用車にて国境の町ナマンガへ。サバンナの中にまっすぐに延びた道路を、時速 100 km 以上の猛スピードで走る。万事**ポレポレ**（スワヒリ語でゆっくりゆっくり）のこの国で、自動車だけは恐ろしく走る。この道沿いは広大なサバンナで、牛や羊、ロバを追いながら、マサイの人々が生活している。



「サバンナの中をまっすぐ延びる道」



「カラフルな衣装で、荷物を運ぶマサイの婦人達」

宿を出発後、2時間少々で、国境の町マナンガに着く。

国境といっても、簡単なゲートがあるだけである。ケニア側で出国手続きをし、そのゲートをくぐるとタンザニアである。そこで入国手続きを済ませ、また、サバンナの中の道を、キリマンジャロ登山の基地、アリューシャの街に向かって、車は猛スピードで走り続ける。1時間ほど走った頃、今日の宿アリューシャのインパラホテルへ到着。部屋に入り昼食をとる。

15時より現地ツアーリストのスタッフと、明朝以降の、スケジュール他打ち合わせ、その後、早めに夕食を摂る。登頂の成功を願い、現地のキリマンジャロビールを飲む。なかなかいける。ほろ酔い加減でベッドにつく。さすがアフリカ、ベッドの周りに蚊帳がつってある。



「美味しいキリマンジャロビール」



「現地のスタッフと記念撮影」



「インパラホテルの寝室」

○ 平成 24 年 2 月 26 日（日）

いよいよ、夢にまで見た、憧れの山、アフリカ最高峰キリマンジャロ（5895m）の登頂開始日だ。朝 7 時 40 分、専用車にて登山口のマラングゲートに向け出発だ。

昨日と同じ、サバンナの中の 1 本道を猛スピードで走り続ける。1 時間ほど走った頃、左手に、かすかに雪をかむったキリマンジャロの雄姿が・・・、そして、道端にあのバオバブの巨木も見ることができた。真にでっかい！！

ここで少し休憩を取り、写真撮影もした。



「かすかにキリマンジャロ」



「巨大なバオバブの樹」

宿を出発して 2 時間 30 分あまり、登山口のマラングゲートへ到着。標高 1970m、ちょうど、四国石鎚山の頂上の高さと同じ位だ。

ガイド・サポーターと打ち合わせの後、いよいよ登山開始。胸が高鳴る。山中 5 泊 6 日の行程の為、我々ツアー参加者 9 名（1 名は添乗員）に対し、ガイド・サポーター合わせて 30 名。6 日間に必要な、水・食材・調理道具・燃料・そのほか日中必要のない寝具・防寒具等々を運び上げてくれる為、総勢 40 名にものぼる一個団体だ。

今日は、マラングゲートから 1 泊目の宿泊地「マンダラハット」（2700m）までの、歩行約 8 km・4 時間半余りの行程だ。



「キリマンジャロ登山地図」



「登山口・マラングゲートで」



「荷物を担いだポーター達」

いよいよ、マラングゲートをくぐりスタートだ。時間は、午前 11 時丁度。
最初は、うっそうと樹木が生い茂るジャングルの中の道を進む。道中、サルに会う。
日差しはまったくない。途中 30 分ほど昼食のため休憩をとる。



「猿のお出迎え」



「どこまでも続くジャングルの道」

マラングゲートを出てからポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）ペースでおよそ 5 時間、
樹林帯が開けた草原の台地に着いた。標高 2700 メートル、マラングゲートから約 700
m を登った事になる。そこが今日の宿泊地マンダラハットだ。

到着すると間もなく、ポーターが洗面器にお湯を入れてくれ、それで顔を洗い、サ
ッパリする。そして、コーヒーを飲んで一息つく。

マンダラハットには、大きな三角屋根の食堂棟と小さな三角屋根の宿泊棟が草地の
大地に点在している。ログハウスの素敵な小屋だ。中は 2 段ベッドに仕切られ、リュ
ック・寝具（シュラフ）・等を運び入れ、寝る用意をして外に出る
外は曇っていて、今にも雨になりそうだ。

夕食は、大きな小屋、食堂棟で、ポーター達が調理してくれた料理を食べる。全
てが美味しい。まだ食欲はありそうだ。



「今夜のねぐら」



「食堂棟と宿泊棟」

食堂棟で早目の夕食を取り、ねぐらに帰って明日に備える。早寝早起きが体調を整えるには丁度良いのだ。また、高山病対策として水分補給は非常に大切だ。

夜、屋根をたたく雨の音、大粒の雨が降っている。翌日が心配だ。



「おいしい夕食」

○ 平成 24 年 2 月 27 日（月）

いよいよ 2 日目、朝起きてみると、既に雨は止んでいた。

朝 6 時にポーターがドアを叩く、洗面器にお湯を入れてくれる。

顔を洗ってサッパリする。まもなく熱いコーヒーとクッキーが 2 枚ほど届く。それでホッと一息つき、荷物をまとめ準備をする。そして、食堂棟に集い朝食をとる。

最初の頃の登山者がヨーロッパの人達であった為、ナイフとフォークを使った洋食メニューである。朝食もなかなか美味しく戴いた。



「おいしい朝食」

午前 8 時 30 分 2 日目のスタート。今日の宿舎、ホロンボハット（標高約 3700m）まで、歩行約 12 k m、7 時間半ほどの行程だ。

樹林帯を抜けると灌木帯に入り、歩き始めて 45 分。視界が開け前方に雪を被った高峰が姿を現す。思わずシャッターを切る。キリマンジャロの東の峰、マウエンジ峰（5149m）だ。そして、遥か左前方にも雪を被ったもう一つの峰が見える。キリマンジャロの最高峰ウフルピーク（5895m）のあるキボ峰だ。あの峰に登ると思うと胸が高鳴る。

「キリマンジャロは、3 つの峰から成り立っており、西にシラ峰（3962m）・中央にキボ峰（5895m）・東にマウエンジ峰（5149m）がある。一般にキリマンジャロ登山と言うのは、中央のキボ峰（ウフルピーク 5895m）に登ることである」



「おいしい昼弁当」



「ジャングル帯終わり頃の樹木」



「灌木帯を行く登山者とポーター」



「前方右手にマウエンジ峰・遥か彼方にキボ峰」

ガイドのポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）という声を聞きながら、歩を進める。
日本での山歩きに比べると、もどかしい位の速さだ。

（あまりの遅さに、日本の山で慣れている人が、いらいらして、ガイドの言う事を聞かず、先を急ぎ、途中で高山病になり頂上を極める事が出来なかったと聞いた。）

また、ポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）というのを、日本語では、だらだらと言うのだと教えた日本人がいた為、だらだら行こうと言うポーターが居り、皆笑いながら楽しんで登山を続けた。

途中 12 時頃食事の為、休憩した。お昼の弁当も美味しく戴けた。食事をしている時ポーターの一人がカメレオンを見つけて捕まえた。手のひらに乗るような可愛いカメレオンだ。食事が済むとまた右手にマウエンジ峰、遥か前方にキボ峰を眺めながら、今日の宿舎ホロンボハットに向けて、灌木帯を進んだ。道中珍しい高山植物にも数多くであった。中でもキリマンジャロで有名なジャイアント・ロベリアとジャイアント・セネシオは圧巻だ。



「灌木帯を行く登山者とポーター」



「カメレオン」



「珍しい高山植物ジャイアント・ロベリア」



「同左のアップ」

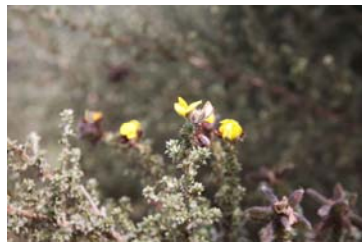
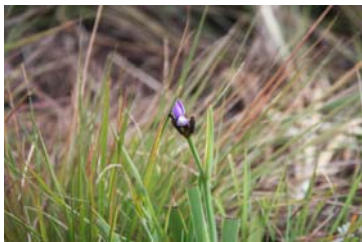
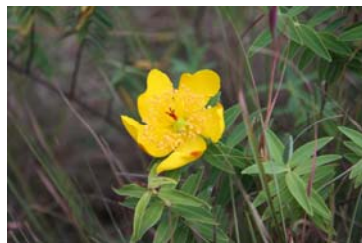


「珍しい高山植物ジャイアント・セネシオ」



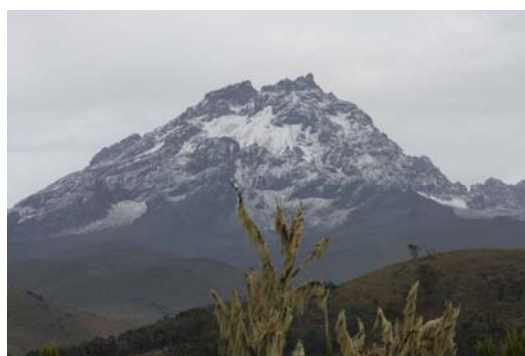
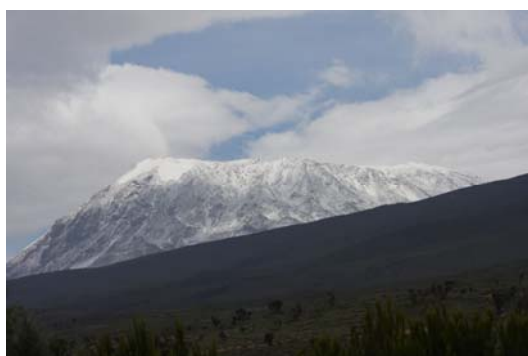
「ジャイアント・セネシオをバックに」

「登山道脇の可憐な草花たち」





右手にマウエンジ峰、左手奥にキボ峰を眺め、道中に咲いていた数多くの花々を楽しみながら、そして、ガイドのポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）と言う声を聞きながら、今日の宿泊地ホロンボハットへと進んだ。ツアー仲間も皆まだまだ元気だ。



「キボ峰 姿は見えども中々近づいて来ない」 「マウエンジ峰は大分手前の為裾を巻くように歩く」

歩き始めて 7 時間あまり、前方に今日の宿舎となるホロンボハットの三角屋根が、そして、テント泊の人々のテント村が見えてきた。
もう、あと僅かだ。皆も一段と元気が出てきたようだ。



「見えてきたホロンボハットの三角屋根」



「ホロンボハットのテント村」

ガイドのポレボレ（ゆっくり、ゆっくり）の言葉に従って、歩き続け、16 時 15 分、12 キロの道のりを 7 時間 40 分かけホロンボハットに到着。

高度差 1000 メートルを登ったことになる。

ホロンボハットのある地点は、高度 3720 メートルで、丁度、日本の富士山の頂上と同じ高さである。そろそろ、高山病の症状が表われるのもこの辺りからである。我々一行は、高度順応の為、ここに 2 連泊することになっている。

昨夜の雨で、上の方は雪となったのであろう、キボ峰の頂は雪で真っ白になっていた。一行は、それぞれの三角屋根の部屋に分かれて入り、二段ベッドに仕切られた部屋で・リュック・寝具（シュラフ）・等々を整理し、寒くないよう防寒着をつけて外に出た。

ここでも、例によりお湯で顔を洗いサッパリし、コーヒーで一息つく。



「雪を被ったキボ峰」



「2 連泊する三角屋根の宿舎」

ホロンボハットで、2 連泊の為、ゆっくりと体調を整えられる。
夕食までの間、コーヒーを飲みながらゆっくりと過ごす。

3日後の登頂のことを考えると、胸がワクワクする。まだ高山病は大丈夫のようだ。宿泊施設には、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・オーストラリア・日本・中国・等々、世界各地から人々が来ていた。

ツーリストの添乗員に、かつて外国人から、どうして日本人はお年寄りが多く、そして元気なのですか？ と訪ねられたことがあり、それはね、お米を主食としているからパワーが出るのです。と答えておいたと聞かされた。本当は、若い人は日本では長期の休暇が取りにくいからですとは言わなかったよ。と……。そう言えば、外国の人々はみな若い人が多いようだった。我々のツアーも、平均年齢は軽く 60 歳を超えている。

外を散策していると、色んな国の登山者とすれ違う。日本の西遊旅行社のツアーに参加している人達にあった、彼らは明日ホロンボハットを登つそうで、我々より 1 日先行して、キリマンジャロ登頂に挑戦とのこと、成功を祈りたい。

夕方少し早目に、食事棟で夕食を摂る。我々の仲間 1 人が、食欲がなく食事に出てこれない。軽い高山病にでもかかったのかな？ 少し心配だ。



「野菜炒めの盛り付け」



「スパゲッティ」

今日も食欲は旺盛、全てがおいしい、完食。 早々に宿舎に帰り眠る。

○ 平成 24 年 2 月 28 日（火）

今日は、高度順応日。ポーターの持ってきてくれたお湯と洗面器で、いつものように洗顔し、朝食を摂る。昨日夕食を摂れなかった一人は、今日も余り食欲がないようだ。でも、無理をして何とか少しだけは食べたようだ。

今朝は時間があるため、朝をゆっくりとして、午前 10 時ごろ必要最小限の荷物だけをリュックに詰めて、体を慣らす為の訓練に出かけた。マウエンジ峰方面まで、高度差約 300 メートル、距離約 8 キロメートルのところまで、およそ 4 時間の往復トレッキングだ。日中の天気は相変わらずずっと良い。どうも小生は、山登りや旅行する時は、本当に、最高の天気に恵まれる。感謝、感謝だ。

どうか最後まで、天気に恵まれ、無事登頂出来ることを祈ろう。

歩き始めて2時間ほど経ったころ、白と黒だけのシマウマのような珍しい柄の岩山が見えてきた。ゼブラロック（4018m）という名所だそうだ。



「名所ゼブラロック」



「ゼブラロックの前で」

そこを、もう少し上がったあたりで、昼食を摂った。

遥か左奥前方向に、キボ峰が望まれる。昨日真っ白になっていた頂上付近の雪は、もう消えかけて、万年雪（氷河）だけが白く見える。



「遥かにキボ峰を望む」



「望遠で撮影」

その後、ゼブラロックの丘の上で、ゆっくりと休憩し、午後1時30分ごろ、周りの景色を眺めながら、2連泊目の宿ホロンボハットに向け、下って行った。

途中に、珍しい、大きな高山植物、ジャイアント・セネシオが数多く見受けられた。

そして、午後4時30分頃に、標高3720メートルのホロンボハットに到着した。



「ジャイアント・セネシオの前で」



「数多くのジャイアント・セネシオ」

高度順応トレッキングで、少し体が慣れてきたのだろう、体調のすぐれなかった仲間も、大分元気が出てきたようだ。

ゼブラロックまでは、標高差 300 メートル程の往復だったので、楽勝だった。みんな、夕食をしっかりと摂り、明日からに備えるべく、早めに眠りについた。

○ 平成 24 年 2 月 29 日（水）

もう、入山 4 日目、今日は、最後の宿キボハット（標高 4703m）まで、約 9.6km・7 時間の行程である。標高差 1000 メートル程を登ることになる。

今朝も、天気は最高。キボ峰の氷河が朝日に輝いて美しい。思わず望遠で写真を撮る。この辺りの標高まで来ると、カメラの電池の消耗も早い。予備の電池を 2 個満タンに充電してきていたが、電池の消耗が異常に早い。少しでも長持ちするようホッカイロと共に、ポケットに入れて持ち運ぶことにした。



「朝日に輝くキボ峰」



「ホロンボハットで登る準備」

小屋の前に、麦の穂のような植物があり、そのそばに首の白いカラスがいた。3700mもあるこんな高いところに、カラスがいるのに驚いた。

空は真っ青、言う事なし！ 午前 7 時 50 分 皆元気よく、さあ出発だ！！
これから先は、ますます標高が高くなる。登るにつれて、だんだんと、空気が薄くなるので、高山病が心配だ。充分水分を摂ろうねと、お互いポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）と声を掛け合って、歩を進める。



「麦のような植物とカラス」



「皆元気よく・さあ出発だ」

幾つかの雑木帯の丘を幾つか越え、歩き始めておよそ 2 時間 40 分ほど経った頃、殆ど草木がなくなり始めた。そして左手前方に目指すキボ峰が見え続けるが、歩けども、歩けども、なかなか近づいてこない。そこから更に 30 分ほど歩いた所に、最後のトイレ休憩所があり、小休止する。



「左手前方にキボ峰」



「最後のトイレ休憩所」

ここを越えると、そこには筆舌しがたい、荒涼とした素晴らしい景色が広がっていた。本当に、これほどの自然の大きを感じる景色は、初めてである。

アタック当日は、頂上以外で写真を撮る余裕は、殆どないだろうから、キリマンジャロらしい写真を撮るなら、この日がチャンスである。思いっきりシャッターを押そう。写真を撮り続けながら歩いていると、右手にマウエンジ峰がぐんぐん迫ってくる、

ガイドに尋ねると、このマウエンジ峰に登頂した人は、殆どいないそうだ。逆に言えば、このゴツゴツと尖がった岩山に登った人が居るのが、むしろすごいと思う。

そして、その道たるや、まるで広大な自動車道でもあるかのように、何処までも、何処までも延びている。

車道のような道で写真を撮った後、振り返ってもと来た道の写真を撮ってみた。これも、遥か彼方に一本道が続いていた。

歩けども、歩けども景色は同じ、キボハットまで行き着くのには、気が遠くなるような道のりだ。



「右手のマウエンジ峰が迫ってくる」



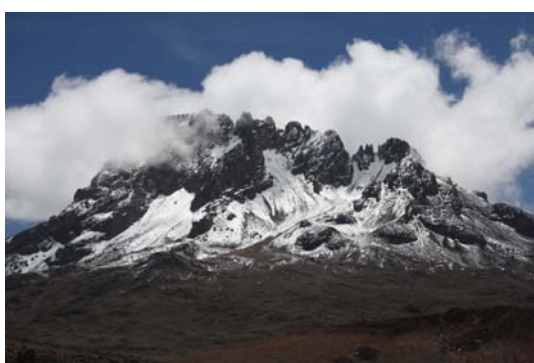
「まるで車道のような道で記念写真」



「記念写真の後、元来た道を振り返る」



「10 分程歩いてもう一度振り返る」



「右手にマウエンジ峰が益々大きく」



「頭に重い荷を載せて前に行くポーター」

もうこの辺りは、富士山を 400m も超えて、4165 メートルぐらいの標高だ。相変わらず、広大な砂漠の中に道があるような登山道を、ポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）と歩き続けた。

景色が変わって 1 時間位経ったところで、瓦礫の山になっている所があった。ザ・サドル（鞍部・標高約 4300m）と呼ばれる地点であった。ここで昼食を摂ることにした。

お弁当を広げ、思い思いに、サンドイッチ・ゆで卵・バナナ・マンゴジュース等を食べ乍ら、ゆっくりと休憩した。

まだ、皆それぞれ体調はいいようだ。



「マウエンジ峰も右後方に小さく」



「思い思いにサドルの岩に腰かけて昼食」

昼食を終え、辺りを見回すと、荒涼とした瓦礫地帯が広がり、まるで月か火星にでも居るような気分になる景色だ。(月や火星に行ったことはないが・・・)

ゆっくりと昼食を済ませ、と言いたいが、標高が高いためかなり寒いので、早々に今日の目的地キボハットに向けて、また歩き始めた。

歩き始めて 40 分程経った頃、前方にかすかに今日の宿キボハットが見えてきた。寒さと疲れで言葉も少なくなっていた皆も、宿が目に入ると急に元気を取り戻した。



「歩いて来た道のりを振り返って」



「前方中央下に今日の宿キボハットが」

今日これまでの道のりは、山に登るというよりは、広大な砂漠の中の、緩やかな上りの一本道を、ポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）と時間をかけて進んできたので、そんなに苦しくはなかった。が、キボハットに近づくともた傾斜がきつくなってきた。いよいよキリマンジャロの裾野に入ったのだなと実感した。

キボハットが見え始めてから、元気を出して歩き続けた皆も、なかなか近づいてこないのにイライラしている。歩いても、歩いても、周りが余りにも広大すぎるため、蟻が進んでいるようにしか思えない。

歩き始めておよそ 2 時間、午後 3 時 30 分、やっとキボハットに到着した。さすがに、標高 4700m の地点。風もあり寒い、冷たさが肌を刺す。

キボハットは、これまで宿泊したマンダラハット・ホロンボハットよりは、ちょっと趣が違う。宿泊する建物は、石造りの建物一棟しかない。建物の中は幾つかに区分けされていて、各部屋には 2 段ベッドが 6~7 ある。そして、その中の広い部屋が食堂に使われている。我々パーティーはすぐ入口の左側の部屋があてがわれていた。

例によって、ポーターが運んでくれた洗面器のお湯で顔を洗い、コーヒーを飲んでくつろぐ。いよいよ、明朝午前零時から夢にまで見たキリマンジャロの登山開始だ。部屋に入って、皆、明日に備えての準備に一生懸命に取り組んでいる。

午後 5 時、夕食を摂って、早めに休む。午後 6 時ごろから 11 時頃まで仮眠をとる。



「キボハット 標高 4703m」



「登り最後の宿舎入り口前で」



「キボハットにもカラスが・・・」

○ 平成 24 年 3 月 1 日（木）

いよいよキリマンジャロへのアタックの日。

夜中に小屋を出発。じぐざぐ、の登高を繰り返し、ギルマンズポイント（5685m）に登り、体力のある者は、更に最高点ウフルピーク（5895m）を往復した後、ホロンボハット（3720m）へ下山する。登りの高度差 1000m・降りの高度差 2100m、歩行約 10～15 時間の、本当に厳しい行程である。

昨夜、午後 11 時過ぎポーターが起こしに来た。いつものとおり、洗面器に入れてくれたお湯で顔を洗い、コーヒーとクッキーを食べ落ち着く。その後軽く朝食を摂って、昨夜用意しておいたリュックサックを持ち出す。防寒具に身を包み、ヘッドライトを点灯し、リュックサックを担ぐ。

外は、真っ暗闇で気温も氷点下、冷たい風が肌を刺す。同行の皆も登頂の成功を祈っているのだろう、緊張した面持ちである。

午前 0 時、いよいよスタートだ。ガイドの先導のもと、一列になりポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）と言葉を口に出しながら、ゆっくりと歩を進める。

小屋を出た所から急に登りにかかる。頂上に向かってジグザグにヘッドライトの明かりが続いている。もう、すでに多くのパーティーが登っている。

登る足元には、岩のふもとに雪が固まっているところが結構ある。足元に注意して歩く。皆無言である。恐らく体調、それも高山病のことを心配しているのだろう。

ガイドも高度障害にかからぬよう、度々小休憩をとりながら、歩を進めてくれる。その都度、水分を補給する。皆も、少しずつ疲れが見え始めている。

2時間ほど登ったころ、同行の女性の一人が大分疲労している様子だ。遅れ遅れになり始めた。ポーターの一人が、彼女のリュックを引き取り、身軽にしてやる。

皆、あまり会話も交わさず、黙々と登り続ける。疲労している彼女も、何とか遅れながらも、ついてきている。我々のパーティーもある程度進んでは、遅れる彼女を待ち受け、少し休んでは、また上へと歩を進める。

4時間程経った頃、同行の最年長の男性（75歳）も、彼女に負けず劣らず疲れが出てきたようだ。彼もまた、ポーターにリュックを引き取ってもらい、身一つで、ゆっくり、ゆっくりと歩を進めている。小生はまだ何とか持ちそうだ。

午前6時過ぎ東の空が少し明るくなってきた、日の出はもう間近のようだ。ポーターにカメラを渡して貰った。撮影しようと思ったが、表に出ている色んな機能のプラスチック部分がはげ落ち、下地の金属部分が露出していた。それでも何とかシャッターを切る事が出来、午前6時15分キリマンジャロの日の出を撮ることができた。丁度マウエンジ峰の上から、太陽が顔を出してきた。素晴らしい感動だ！



「キリマンジャロの日の出」



「キリマンジャロの日の出」

カメラケースをポーターのリュックで運んでもらったため、無造作に扱った事に依ってこう言う事が起きたに違いないと思い、ツーリストの添乗員に、今回は小生が丁寧に扱うよう依頼せず、注意を怠ったのが悪かった、これからは、カメラなどの機材は丁寧に扱うようにと、お願いした。

ああ、これで又、カメラを修理しなければならない、困った事になったと思った。

陽が昇り始めると、辺りは急に明るくなる。稜線の岩の形は見えるが、なかなか近づいてこない。気温はかなり低く、手と足が冷たい。一足ごとに喘ぎ、ほんの少ししか登れない。しかし、一步一步、進むしかない。少し気分もすぐれないようだでも、たいしたことはない。

登り始めて、およそ6時間40分、最初の頂上ギルマンズポイントが見えてきた。

もう一度カメラを取り出して、頂上を目指して岩山を登っている、仲間の後ろ姿をカメラに収めた。

不思議な事に、今朝、確かに壊れていたプラスチック部分が壊れていない。綺麗なままだ。まるで狐につままれたようだ。何が何だか分からなくなった。そのことを添乗員に告げると、川上さん、それも高山病の症状の一つ、軽い「幻覚症状」かもと言われ、ポーターを攻めなくてよかったと、ほっとした。

夢にまで見たアフリカ最高峰キリマンジャロの頂上はもう目の前だ。皆、最後の力を振り絞って、頑張っている。

ギルマンズポイントの標識が見える。快晴。気温は氷点下、-10 度位はあるのだろうか？ かなり寒い。手足は特に冷たい。それでも感激があふれ出し、気分は最高だ。頂上までもう少しだ、頑張ろう。

午前 7 時 11 分、キリマンジャロのギルマンズポイント (5685m) の登頂に成功。我々ツアー参加者 6 名と添乗員 1 名の計 7 名が同時に登頂した。疲労の厳しい 2 人の仲間は、ポーターと一緒に、遅れて我々の後ろから、登ってきているようだ。

今まで雑誌やテレビで見ていた標識は、すっかり新しいものになっている。非常に新しく、出来上がったばかりのようだ。

ギルマンズポイントは、富士山でいえば頂上にある浅間神社の奥宮のようなもので、ここまで登ればキリマンジャロに登頂 (ギルマンズポイント 5685m) したとして、登山証明書がもらえる。でも、折角ここまで来たのだ。あと 2 時間程歩けば、キリマンジャロ最高地点ウフルピーク (5895m) に到達できる。頑張ろう。

頂上で、記念写真を撮る。少し頭が痛い。軽い高山病にかかったのかな？



「ギルマンズポイントはもうすぐだ」



「ギルマンズポイント (5685m) 登頂」

ここで、7 人の登頂者の内 2 名は、疲労の度合いを測り、ガイドよりここより上の登頂を断念するよう言われ、うしろの 2 人と共に、下山の途に就くことになる。

残った我々 5 人は、後ろ髪を引かれる思いで、2 人をそこに残し、ガイドとポーター 2 人と共に、次のステラポイント (5700m) まで、歩を進めることとする。

雪の残った稜線歩きが延々と続いている。滑って転ばないように気を付けながら、一歩ずつ確実に足を踏み出してゆく。少し頭がボーっとしてくる。軽い高山病の症状が現れだした。他の参加者も、少しずつ、体調が悪くなっていっているようだ。

少し進んでは休み、また少し前進する。そうやっておよそ1時間、午前8時13分次のピークのステラポイント（5700m）に到達。ここで女性の参加者1名が脱落。ポーターと共に引き返すことになった。



「ステラポイント（5700m）」

またまた後ろ髪を引かれる思いで、残りの4名（男性3・女性1）は、ガイド1名・ポーター1名と共に、キリマンジャロ最高地点ウフルピーク（5895m）を目指すこととなる。少し休憩し水分を補給、体調を整える。少し頭が痛い。寒さも身に伝える。しかし後1時間少々で、**アフリカ大陸最高峰「キリマンジャロの最高地点ウフルピーク（5895m）」**に立つことができるのだ。夢が叶うのだ。

お互い励ましあいながら、また、ゆっくりと、一步一步と歩を進める。

歩き始めて20分余り左手前方に、頂上直下の氷河が姿を現した。スイスやカナダの氷河とは趣を異にし、まるで切り立った氷の壁を見ているようだ。赤道直下にこんな氷河があることも不思議だ。



「頂上直下の氷河」



「頂上直下の氷河」

頂上まであと僅かだ。夢の実現もうすぐだ。皆も、大分疲労が激しくなっているようだ。が、それぞれ、夢の実現のため、歯を食いしばって頑張っているのが伝わってくる。小生も負けずに頑張らなくては・・・。

少し歩いては立ち止まり、また歩き始める。そうした繰り返しを続けながら、「**キリマンジャロ最高地点ウフルピーク（5895m）」**を目指す。

頂上が近づくに連れて、左手前方の氷河もだんだんと大きく迫ってくる。

地球温暖化の影響で、この氷河も8年後には、消えてなくなると言われている。呼吸も乱れて、しんどいけれど、氷河が消えて無くなる前に、記念写真を撮っておこうと思い、ポーターにシャッターをお願いする。



「頂上直下の氷河」



「氷河の手前でハイポーズ」

ステラポイントを出発してからおよそ1時間15分、前方にウフルピークの標識が見えて来た。

「平成24年3月1日・午前9時30分」

「アフリカ大陸最高峰キリマンジャロ(5895メートル)登頂に成功」

一緒に登頂できた4人の仲間と、体を抱き合って喜ぶ。皆感激で顔をくしゃくしゃにしている。思わず喜びの涙がにじむ。

それまでの疲れも吹っ飛び、皆喜びに満ち溢れ、感動に浸っている。何組かの、ヨーロッパのチームも記念写真を撮りあっている。我々も記念写真を撮影しなくっちゃ・・・。

東北の彼は、バッテリーが上がってシャッターが切れず大弱り、川上さん写真よろしくねと頭を下げる。(ホッカイロで電池を温めていたのが大正解)



「登頂者全員で記念写真」



「ポーターのサイモンと二人で」

キリマンジャロは、富士山を一回り大きくしたような山で、山頂には大きな火口がある。さすがアフリカ大陸最高峰、遮るものが何もない素晴らしい展望だ。あのヘミングウェイが、豹の屍が横たわっていると書いている氷河は、神々しいまでに美しい。



「南東の稜線越しにマウエンジ峰が見える」



「あの氷河の中に果たして豹が居るのか？」

感激の余韻に浸る間もなく、下山の用意。今日はこの後、キボハット（標高 4703m）に立ち寄り、簡単な昼食を摂り、荷物をまとめて、今夜の宿舎ホロンボハット（標高 3720m）まで、高度差 2100 メートルを、一気に降りなければならないのだ。1 日半かけて登ってきたコースを半日で降ることになる。

皆、感激の喜びも束の間、現実に戻ると、一気に疲れが出て来たようだ。少し頭がボーとしていると言う。軽い高山病の症状だろう。

頂上に佇んでいると、手足は凍え、寒さが身に伝わる早々に引き揚げねば……。午前 9 時 45 分、下山開始。今日も、ガイドのポレポレ（ゆっくり、ゆっくり）の言葉に従い、我々もポレポレと口に出しながら、一步一步ゆっくりと歩を進める。稜線には雪が固まっている、滑らないよう十分注意が必要だ。

歩き始めておよそ 1 時間 20 分、今朝ほど通過したステラポイント（5700m）に到着、水分補給して小休止。



「疲れた体でハイポーズ」



「登頂者全員で記念撮影」

ここでそのまま休みたいけれどそうはいかない、今日は一気に 2100m の標高差を降りなければならないのだ。だんだんに疲労がたまり、気力もなえかけている体に鞭打って、降りることにする。上から見下ろすと、キボハット（標高 4703m）が見えている、あそこまで 1100 メートル降りるのだ。

午前 11 時 15 分いよいよキリマンジャロの稜線より下降開始。
真下にキボハットが見える、が、なかなか近づいてはくれない。最初は露岩地帯なので足元に注意しながらゆっくりと降った。そして途中からは砂礫の急坂となったので、下りは途中から、富士山の須走口と同じように、一気に滑るように降りることができる。スピードは出るけれど足が思うようについていかない。膝もがくがくする。しかし気力を振り絞って降るしかない。何とかキボハットに到着した。



「これから降る高度差 1100 メートル」



「この辺りは富士山の須走のようだ」

キボハットに到着するや否や、軽く食事を勧められる。が疲労困憊で何も喉を通らない。食事が喉を通らないのはこのツアーで初めてである。体はしんどく頭も痛い。

しかし、これから、今夜の宿マンダラハット (3720m) まで、7~8 時間かけて登って来た道を、3~4 時間かけ、標高差 1000m を降らなければならないのだ。ゆっくり休む間もなく、荷物をまとめ、必要最低限のものだけをリュックに詰めて、あとはポーターに運んでもらうよう準備する。準備が整うと、すぐ出発だ。

最高地点まで行けず、途中で降りた 5 人は、ゆっくり休憩できたのだろう、我々に比べて元気がいい。

もう、今朝から 12~13 時間は歩いているだろうか？

行きはよいよい、帰りは怖いではないが、これからの降りを思うと気分が重い。

周りの景色を堪能することかなわず、只ひたすらホロンボハット目指し、疲れた体に鞭打って、足元を見つめながら歩を進める。

16 時ごろようやくホロンボハットに到着。午前 0 時に登山を開始してから 16 時間余り、長い長い 1 日が終わった。

今日の宿舎、三角屋根の部屋に入り、いつものように、リュック・寝具 (シュラフ) 等々を整理し、眠る準備を整えて一服する。

夕方ポーターが食事の案内に来る。食事棟に移って、夕食を摂ることにした。スプーンを口に運んだ瞬間、気持ちが悪くなり吐きそうになる。早々に夕食を摂るのをやめ、一人ねぐらに戻り、アリナミンを 3 錠飲んで眠ることにした。

○ 平成 24 年 3 月 2 日（金）

早く休んだのと、アリナミンが効いたのか、疲労も回復してすっきりと目覚めた。そして、小生の気分と同じく、天気の方も本当にすっきりとした、美しい青空だった。

昨夜の雨でまたウフルピーク（5895m）は、真っ白な雪で覆われている。その山肌に朝日が当たり、黄金色に輝いている。まるで昨日の登頂を祝福してくれているように……。感激が胸に湧き上がってくる。

いつもの通り、ポーターの運んでくれる洗面器のお湯で顔を洗い、コーヒーとクッキーで、爽やかな朝を迎えた。その後の朝食も、昨夜の事が嘘のように、完食した。

今日はこの後、登山口のマランゲート（標高 1970m）まで、1 日目に宿泊した、マンダラハットを通り越し、標高差 1800 メートル程を降りる 7～8 時間の行程だ。いよいよキリマンジャロとお別れの日だ。

食事の後、荷物を整理して、外に出、思い残すことの無いよう、ホロンボハットからの景色をカメラに収めた。そして、一緒にここまで来たガイドポーターの皆と記念撮影もした。



「ホロンボハットの宿泊棟とマウエンジ峰」



「ポーターのサイモンとその従弟と」



「ガイド・ポーター達と記念撮影」

登頂できた喜びを胸に、午前 8 時 10 分、もう二度と訪れる事がないであろう、「ホロンボハット」を後にした。5 日前に通って来た道を降るだけだ。

途中、色んな国の登山者とすれ違い記念写真も撮った。キリマンジャロに登頂するという目的が同じのため、英会話の出来ない小生でも、片言の単語、身振り手振りでお互い気持ちが通じ合うことが出来、楽しかった。

「以下道中の写真」



「ホロンボハットを後に灌木帯を・・・」



「ドイツの美人登山者と」



「フランスの登山者と・・・」



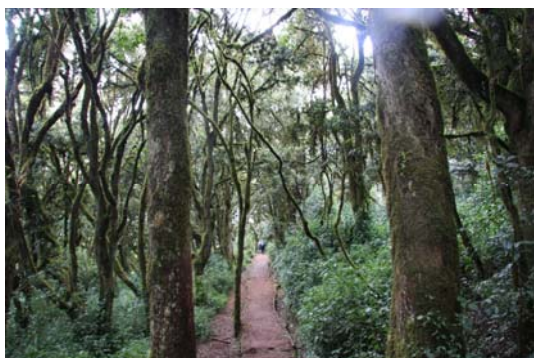
「イギリスの登山者と」



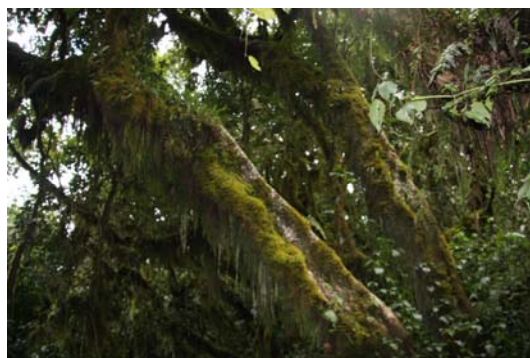
「灌木帯の中を降る同行者」



「ジャングル帯に入る・トロロを被った様な不思議な樹」



「ジャングル帯の下山道」



「ジャングル帯の下山道」

歩き始めて、7時間余り、**15時25分**。スタート地点、マランゲゲートに到着。ツアー会社の添乗員が下山届・登頂証明書等の手続きを終えると、ガイドポーター全員が一堂に会し、その場でアミューズトラベルの添乗員から、ガイド料・ポーター料をそれぞれに支払った。皆白い歯を見せて、嬉しそうな表情だった。

その後、彼ら全員でキリマンジャロの唄をスワヒリ語で歌ってくれ、終わりに全員で記念写真を撮り、厳しくも楽しかった6日間の山行を終えた。

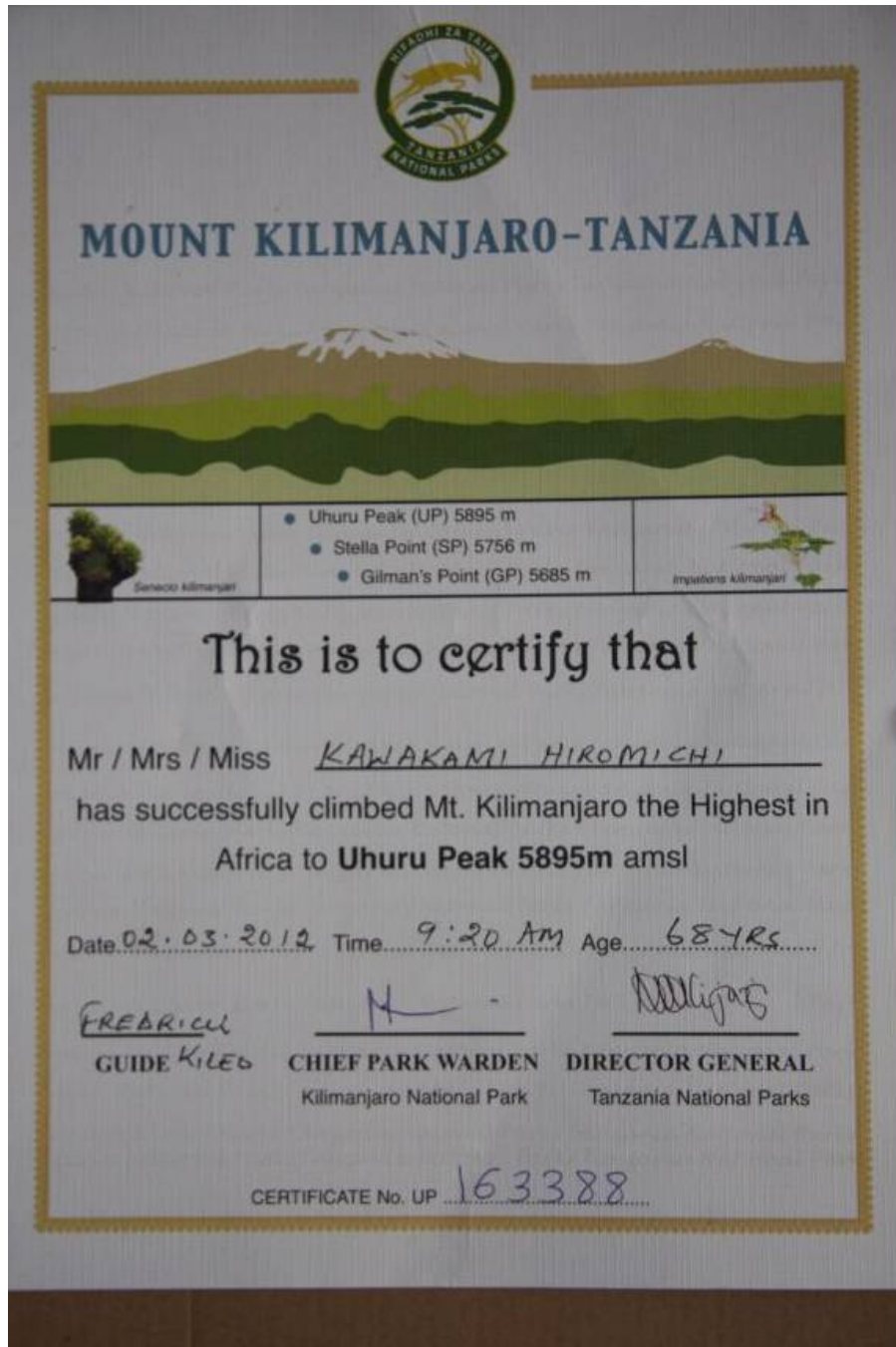


「最初の入りロマランゲゲート前で」



「全員で記念撮影」

「アフリカ最高峰キリマンジャロ（5895メートル）に登頂する」と言う、定年後最後の夢が実現でき、登頂後の降りの苦しかった事も、今日はもう素晴らしい喜びに変わっている。もう思い残すことはない。



「タンザニアで発行してくれた登頂 証明書」

この後ツアー日程では、2月25日に宿泊した、アリューシャのインパラホテルに戻り1泊、翌朝専用車にて国境の町ナマンガへ。タンザニア出国を済ませケニアへ入国。アンボセリ国立公園で1泊2日の日程でサファリを楽しんだ。

このサファリもいろんな動物たちが、生息しており心休まるひと時を過ごすことが出来た。そしてまた、ここケニア側から眺めるのが、以前から我々が知っていた、美しいキリマンジャロの雄姿であった。

以下、アンボセリ国立公園での動物観察、マサイ族の村訪問、ケニアの街並みそして、ケニア側から見る雄大なキリマンジャロの写真を羅列して掲載する。



「専用のトヨタ車」



「国立公園内・アンボセリ・セレナロッジ」



「ロッジ内のベッドルーム」



「夕食メニュー」



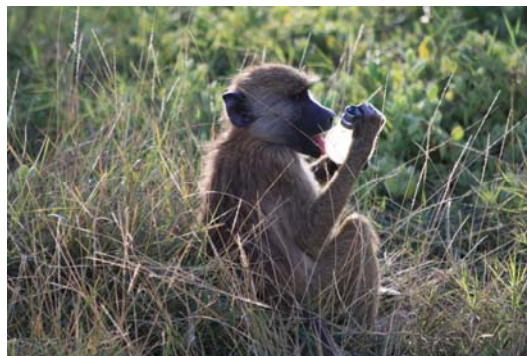
「サファリパークの見学用車両」



「イボイノシシ」



「カンムリワシ」



「この電球美味しいかな」



「水を飲まなきゃあ」



「戯れるサル達」



「散歩するシマウマ」



「バッファローとダチョウ」



「仲良しガゼル」



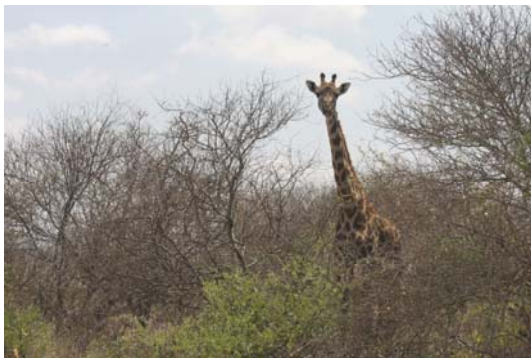
「休息するヒヒ」



「美しい冠ヅル」



「綺麗なホロホロ鳥」



「キリンが首だし、こんにちは」



「像の親子がお散歩です」



「マサイ族の歓迎風景」



「マサイ族の住居と子供たち」



「マサイ族の親子でポーズ」



「マサイ族の笑顔の子供」



「マサイ族の先生と」



「マサイ族の土産売りの青年と」



「広大なサバンナで家畜の放牧」



「どこまでも、どこまでも続く1本道」



「車道を横切る家畜の群れ」



「車窓より望む、ケニアの風景」



「車窓より望む、ケニアの風景」



「車窓より望む、ケニアの風景」



「車窓より望む、ケニアの風景」

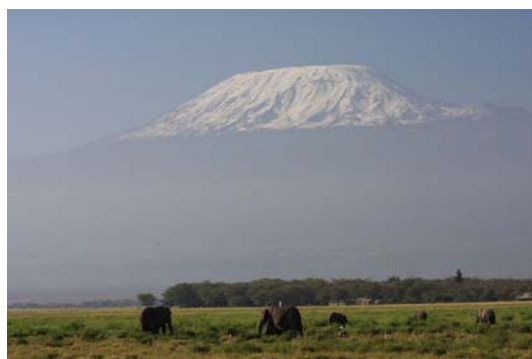


「車窓より望む、ケニアの風景」

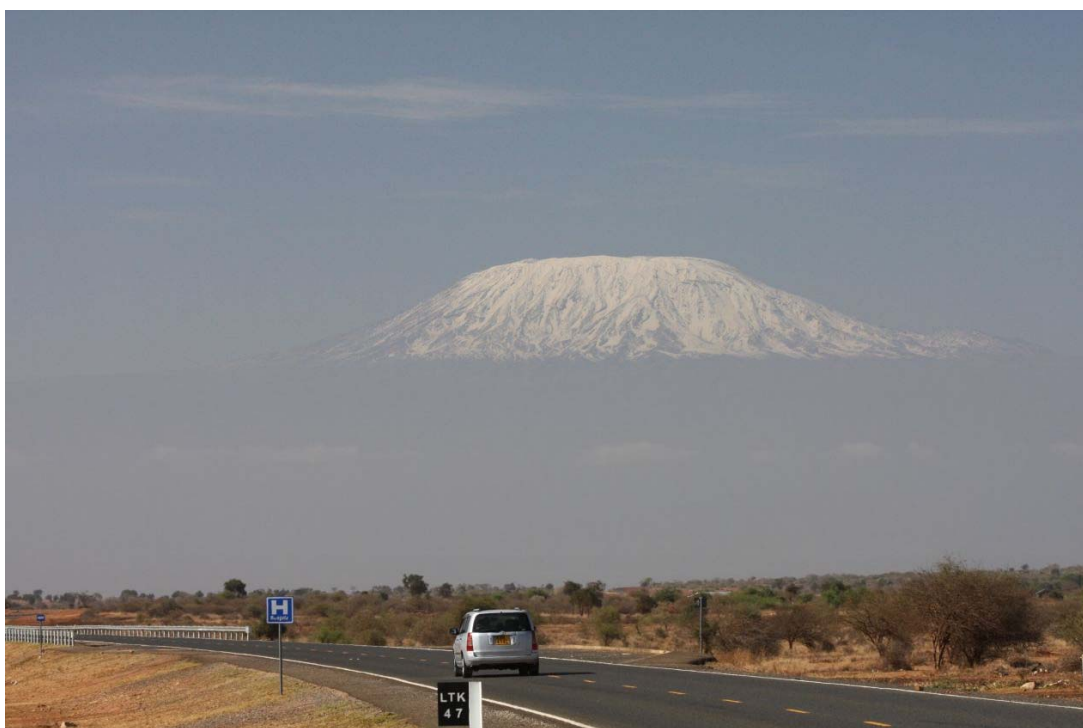
「ケニア側から眺める雄大なキリマンジャロ」



「マサイ族の住居とキリマンジャロ」



「像の群れとキリマンジャロ」



キリマンジャロよさようなら・・・・・・・・。